



名掛丁東名会 梅津恵一

山は高さのみにて尊からず、木々多くして裾野広き故に尊ぶ。こんな格言がぴったり当てはまるのが藤村だ。藤村は私に様々な出会いを与えてくれた。

街の再開発でわが町内会は「島崎藤村」を旗印に掲げたので、平成3年に藤村の生まれ故郷、木曾馬籠にある藤村記念館を有志20数人で表敬訪問した。その建物は昔の木造校舎の廊下のように、通路は床でなく土間であった。古い家屋を再利用して建てたものなのだろうと思った。ところがその後の調べでこの記念館は戦後まもなく村の人たちの勤労奉仕によって造られ、しかも谷口吉郎という後に赤坂御所（旧東宮御所）や東京国立近代美術館などを設計した、日本を代表する建築家がその設計を手掛けた事を知って衝撃を受けた。各地の博物館や美術館を見ると、有名な建築家が「これは私が造りました」と言わんばかりの奇抜な建物が多く、藤村記念館のように作為を感じさせない建物を設計する建築家に不思議な魅力を感じた。

藤村記念館の建設は昭和18年8月に藤村が亡くなった際に、大磯で生前、藤村と親しくしていた菊地重三郎が木曾馬籠にある島崎家の墓に藤村の遺髪と遺爪を埋葬するために訪れ、村人たちと親しくなったことが事の始まりだった。それが縁で戦時中、馬籠に疎開した菊地重三郎が村人に「毎日酒ばかり飲んでいてはだちかんぞ。藤村のために敬称する何かを造れば大勢の人が来るぞ」と諭した。馬籠はかつて中山道の宿場として繁栄していたが、明治以後国道や鉄道が他の地域に整備されたために、当時は訪れる人もなく「猫があくびする村」となっていた。

村人たちがその話に共鳴し、実現へと向かったのは昭和20年1月、菊地重三郎が東京に出かけ、旧知の野田宇太郎（中央公論社「文芸」編集長）に相談したことで動き出した。しかし戦時中で「文化事業」の言葉さえ禁句となっていた時代だったので、野田宇太郎は協力を約束したものの、その話は親友の建築家、谷口吉郎に話をしただけだった。

相談を受けた谷口吉郎が動き出したのは戦後の昭和21年10月だった。野田宇太郎とともに初めて馬籠を訪れたが、日々の食糧さえ事欠く時代に藤村のために記念館を建てようという企ては、正気の話とは思えなかった。しかし村人たちの郷土出身の藤村に寄せる敬愛の念は深く、敗戦直後の苦しい生活が、一層郷土の誇りを何とかしようとして奮起させている姿に、谷口吉郎は心を打たれた。

その工事は谷口吉郎の設計のもとに、すべて村人たちの手作業で地元の建材を使って、各自の農作業の合間を縫って行われた。木を切る人、壁を塗る人、石を切る人、瓦運びは小学生が手伝った。こうして1年の歳月を掛けて日本初の文学館が誕生した。昭和22年11月15日の除幕式には長野県知事をはじめ、佐藤春夫、有島生馬、亀井勝一郎など藤村と交流があった多くの人々が参加し、また近隣の村からも物見遊山の人々で会場は立錫の余地がなくなるほどの賑わいだった。

谷口吉郎はこの建設について後に随筆「記念碑十話」で次のように語っている。

「菊地重三郎さんは当時を回想して、その著書「木曾馬籠」の中にこう書いておられる。「重い足を引かずするようにして一步一步慎重に、一里もの坂道を、男たちは、火をかけたがら登ってくる。その有様を夜の闇の中で見ていると、わたしには彼らの姿が、材木の翼をはやした天使のように思え、この高い山国から、四方八方に向かって、大声で叫びたい衝動を感じた。この農民を見よ！」と。中世の昔、アルプスの山奥で村人が自分の手で小さな教会堂を建てたのと同じく、日本の木曾では戦後、貧困のどん底の時代に、村人が素朴な手仕事で記念堂を建てた。ただスイスのそれは神を信ずる建設であったのに対し、馬籠のこれは詩の感動による建設であった。」

また完成後の感想を聞かれ、「出来映えの良し悪しについての批判は甘んじて受け入れるが、無いほうが良いといわれるのが一番つらい」と答え、いかに馬籠の風景との調和を重んじていたかが伺われた。

建築家、隈研吾は平成9年、藤村記念館が開館50周年を迎えた時に、朝日新聞で谷口吉郎について次のように語っている。

「忘れかけられていた建築家が、ちょっとしたブームである。名前は谷口吉郎・・・その前衛ぶりを知りたければ彼の代表作である信州馬籠にある藤村記念堂を訪ねることをおすすめする・・・たいてい人はそこに建築がないことに落胆する。あるのは庭と塀。庭は島崎藤村の生家の跡だそうである。そのわきにわずかに廊下のような細長い建築が建てられている。この『できる限り何も建てない』というところが、谷口が今日、前衛と呼ばれるゆえんである。谷口は建築よりも環境が大事であると考えていた・・・わずかに建てて、大きなものを建てた以上の感動を人々にあたえられることも、よく知っていた。だからこそ、谷口は今すぐ新しいのである。」

藤村の座右の銘は「簡素」である。藤村と生前面識がなかった谷口吉郎が藤村記念館の設計を任せられたのも不思議な「縁」を感じた。

昨年、宮城県美術館の新築、移転騒ぎが話題となり、前川國男が設計した建物の歴史性と現地の環境を考慮して中止が決定された。前川國男は谷口吉郎と同期で東大を卒業しているが、高度成長時代とともに「建築を肯定する」仕事をしてきた。それに反して谷口吉郎は隈研吾が指摘しているように、戦後逸早く「建築よりも環境を重視した」仕事をしてきた。また歴史的建造物の保存にも努め、「明治村」を開設した。その先見性は今こそ再評価されてしかるべきであろう。



岐阜県の藤村記念館の庭（写真提供 梅津氏）

#### 参考文献

『記念碑散歩』 谷口吉郎編 文芸春秋昭和□年発行  
『木曾馬籠』 菊池重三郎著 中央公論美術出版昭和□年発行